

博報堂教育財団 第14回「日本研究フェローシップ」成果報告書

I. 研究成果概要

氏名(フリガナ) 在住国名	佐藤 将之(サトウ マサユキ) 中華民国(台湾)
所属・役職	国立台湾大学哲学系・教授
招聘回(招聘研究期間)	第14回 (2019年9月1日～2020年8月31日)
受入機関	京都大学文学部
招聘研究テーマ	明治時期日本における「東洋哲学」の誕生
研究目的	本研究では「東洋哲学」という学術領域が明治時期の日本において誕生した状況を主な考察の対象とする。それは従来、漢学といわれていた伝統的な知識体型に西洋の哲学という学問が移入したことによって生まれたものであった。それが、大正時期以降の日本の知識人における知的フレームワークの一つとして、日本固有とされる思想的諸価値への理論化や、修身への学問、実践的探求、それに「国民」イデオロギーの形成化への重要な契機として機能するに至った思想的状況も併せて明らかにしたい。
研究成果概要	
<p>1. どのように研究を進めたか</p> <p>本研究は京都大学という日本滞在という条件を生かして進められる研究ということで、(1)京都大学付属の諸図書館(人文研究所の資料も含む)、国立国会図書館(関西分館の資料も含む)を中心にライブラリーワークを行った(ただし2019年の年末まで)。コロナ感染の拡散により、外出できなくなった状況によって、重要になったのは、古書店やオークションなどのインターネット・ツールによる明治時代の各種書籍資料の収集であった。インターネットによる購買だと送付先が日本国内に限定されるため、今回の滞在時期にどれだけ収集できるかがかなり重要になった。</p> <p>今回、一年近くにわたる京都大学訪問研究には、周知のように、コロナ感染対策のために全期間の三分の二近くを自宅研究という方式で進めざるを得ない状況とはなってしまったが、滞在の最初に収集した資料やネットツールにより得られた情報や知見をもとに、設定したテーマの分析、研究作業はそう問題なく遂行することが出来たと信じる。</p>	
<p>2. 研究によりどのような知見が得られたか</p> <p>日本で研究を進めるに際し、まずは以下の四つの具体的なテーマを設定した。すなわち:</p> <p>(1) 明治中期の「性」論を通じたにおける哲学的議題の成立と展開 (2) 明治から大正時期にかけての「孔子論」と「孔子像」の展開 (3) 『老子』、『莊子』、「楊朱」関連言説への理解を通じた明治における道家系テキストの再評価と「哲学化」 (4) 西田幾多郎『善の研究』の思考基盤としての「中国哲学」の内面化と「分解」</p> <p>上記した四つのテーマにおいて、(3)と(4)のテーマにおいて顕著な進展があった。</p> <p>まず(3)のテーマでは、西洋哲学の受容プロセスにおいて、中国古代に、孟子の論敵として引用される楊朱に関する言説が、「哲学」という学術領域の訓練を受けた時期と度合いにより、ただの「君を無きにする」と孟子に批判されたとして引用されてきただけの「戦国諸子」の一人に過ぎなかった楊朱が、エピキュロス学派や果てはスピノザなどとも比較されて「哲学的」に深化していくプロセスを実証することが出来た。</p> <p>今回、京都大学に訪問したという機会を鑑みて試みた(4)西田幾多郎の『善の研究』の思想構造の分析も、現在まだ分析途中であるが、将来、大きな実りを予想することが出来る発見がいくつかあった。西田哲学の「東洋思想」的要素というのは、主に西田の参禅体験という実践背景から説明されてきた。しかし、『善の研究』の本文を読んでもという「禅語録」などからきた論述はほとんどなく、むしろ、戦国諸子の著作に(本人は無意識かもしれないが)淵源する</p>	

言説や思考が豊富だという点を発見できたことは大きい。

3. 研究成果(予定を含む)

○論文

Sato, Masayuki: "The Birth of the Image of 'Egoist-Epicurian Philosopher' Yang Zhu: The Development of Discourse of Yang Zhu during Meiji period in Japan", Ed. by Defoort C.: *The Many Lives of Yang Zhu: An Historical Overview of Yang Zhu Portrayal*, NY: SUNY Press, 2021 (forthcoming)

本文は、中国戦国時代の思想家、楊朱の言説が、日本の明治知識人たちの「哲学」受容によって「快樂主義者哲学者」としてのイメージが作られるプロセスをトレースした論考である。

○口頭発表(題目, イベントの名称, 日・場所, 内容の概略(200字以内))

(1)「The Birth of "Chinese Philosophy" in during Meiji Period of Japan」、中国広州中山大学、2019年9月22日(第六回 日中哲学フォーラム)

(2)「21世紀における東洋哲学の意義:「礼治」理論と『荀子』思想の役割を中心に」、2019年10月11日、京都大学人間環境学部講演

(3)「明治日本における『中国哲学』学問領域の誕生」、2019年10月21日、東京大学東アジア文藝書院講演

(4)「*Evolutionary Change of the Concept of Ren during the Warring States' China*」、(International Society of East Asian Philosophy 2019 Conference, East Asian Philosophy: Past, Present and Future) 12月16日、明治大学。

(5)「明治日本における『中国哲学』学問領域の誕生」、2020年1月16日、京都大学人間環境学部講演

(6)「近代日本における中国哲学の誕生——明治10年代に東京大学で行われた諸講義を中心に」(東アジアにおける哲学の生成と展開——間文化の視点から、第二回研究会)、2020年5月24日、国際日本文化研究センター(京都)

○その他の活動

京都大学では、2019年9月より2020年1月まで、主に京都大学文学部で、浅原達郎教授の「戦国楚簡」、吉本道雅教授の「中国古代史」、宇佐美文理教授の「中国思想史概論」、古勝隆一教授の「荘子」、以上四つの授業のほぼ全ての回を聴講させていただいた。

4. 今後の活動予定

国立台湾大学哲学系において、継続してこの分野における研究、教学を行うとともに、本研究の成果を出版、研究発表、学術講演等の形で世に問うていきたい。具体的に決まっていることとしては、井上円了の思想に関する中国語の論文集を1年以内に編集し、台湾の出版社に審査を付託する予定である。